



# 武蔵野

埼玉大学図書館 2012年3月15日11号



## 3.11から1年 一年を振り返り、今を考える

**はじめに** 3.11 東日本大震災・福島第一原子力発電所（以下原発）事故から1年が経ちました。突然命を奪われ、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。今なお行方がわからない多くの方々（3,155人）の捜索が進展し、一刻も早く皆様の安否が判明することを祈っております。

大震災の被害と衝撃はあまりに大きく、1年を経た今も同じ苦しみが続いています。極限の破壊力を持った大震災。被災の全体像が明らかになりつつある今、被害の惨状を記録し、教訓とするために特別番組が放映されました（NHK スペシャル、2012年3月4日：映像記録3.11、「あの日を忘れない」）。映像が映し出す光景の心理的衝撃を考慮し、黒い画面に白抜きの文字が浮かびあがります。「これから放送する番組は、3月11日震災当日の激しい揺れや津波の映像を使用しています。被災された方、特に子どもたちには、つらい映像が含まれているかもしれません。私たちは今後の防災・減災に役だつと考え、この番組を制作しました」。無言の字幕が、類例のない大災害を象徴的に表しています。

個人的なことになりますが、3.11以降、震災・原発事故で非常事態と社会的混乱が続いたうえに、私が受けた精神的な大きなダメージが加わり、教育・研究活動もまた混乱しました。卒業生・在学生・新入生との別れと新たな出会いは、混乱の中で混沌としたまま過ぎてしまいました。放射能汚染の問題もあり、山歩きを組み込んだゼミ合宿の実施を決断するまでには相当の時間

を要しました。気力を充実させ、注意を集中させることが難しかったからです。12ヶ月が過ぎても、福島県を初め東北地方の復興はままならず、多くの住民（343,935人）は地元を離れ、仮設住宅や避難先で生活せざるを得ない状況にあります。未来を見通せない大きな不安のまっただ中にありながら、今多少の落ち着きを取り戻しつつあります。3.11から1年、今までを振り返り、私たちにとって現下の課題が何であるかを考えてみたいと思います。今回の大災害をもたらした巨大地震と同規模のものが、近い将来高い確率で日本で起こることは、多くの研究者の一致した見解であり、早急に実効のある対応・対策を講じなければならぬと考えるからです。

**危機から立ち上がる** 巨大地震が発生したとき、多くの住民は、あれほど大きな津波が襲うとは予想できなかったといわれます。「地震で揺れが収まってピンときたのは『津波が来る』という危機感でした。誰もが今までに経験したことのない長時間の大きな揺れだったのと海沿いに居たため、どこからともなく『10メートルの津波が来る』『逃げろ』という本能的な、誰かの叫び声が聞こえました」。「でも正直、ここまで巨大な津波が発生するとは誰も思っていなかったと思う」、造船所で働く人も予測しないものでした（1, p. 44）。

昨年12月に仙台で「青年たちの交流会」があり、参加させてもらった折に、被災の現実を写真と共に詳細に聞かせていただきました。山本さん（仮名）の父母祖父母は

必死に2階に上がり津波を逃れました。目前に迫り来る海水に観念し、「死ぬときは一緒に」と紐で体を結わえあったそうです。隣家と彼女の実家のみを残し、近隣の家はすべて流されました。安置された身元不明の多数の水死体、一人一人家族であるか確認して回る人、遺体は損傷している場合が

多く見分けが難しいといいます。「消防団でしたので、…捜索の最中、初めて見たご遺体は、知っている人でした。肌の色も変色し、顔の判別もつきません。着ている服や持っている物で、かろうじて人物が特定できました」(2, p.15)。「修羅場」を経験した人にしかわからない悲痛な思いです。



図1 宮城県山元町



図2 無残な駅舎橋脚

青年消防団員が携わった「生存者確認」の作業は、ことばで表現できない極限状態です。「重機をつかい、瓦礫の撤去を行いながらの捜索活動は、凄惨なものでした。遺体が五体満足で見つかるのはまず稀でした。体の一部だけといった状況も多々ありましたし、何より知っている方の遺体を引き上げる作業がつらかった」(3, p. 13)。「数週間は満足に眠ることができず、毎日そうした光景を見て歩くと、気分が滅入っていました。どんどん、どんどん自分がおかしくなっていくのがわかる…」(3, p. 13)。生きる意味を失った人も少なくありませんでした。「道路がまだ復旧していないころは、海に向かって歩く人が多かったです。家族も誰もなくなってしまって、生きる意味がないから死んでしまいたいって人が。でも、消防団員である以上は、そう言う人たちの首根っこつかんででも阻止しなければ、死ぬなら俺の目の前じゃなくて遠くところで死んでくれって」(3, p. 13)。人は、孤立しては生きられないということです。「人が生きることの原点に立った時、人は一人では生きられないことを痛感する。人のために何ができるか。地域でどう生きるかを深く考える。電気も電話も車も、文明がもたらしたものはひとつも使えない状況で、生き残るために助け合う。それは昔から当たり前に行われてきたはずである。…

人と人とのつながり、支え合いによって支援を待つことなく立ち上がり、復興に向かって協力し合う私の地域を見た時、青年団で学んだ(助け合い)精神が最大のライフラインであることを実感した」(4, pp. 23 - 24)。青年が地域の復興になくってはならない大きな力を発揮しているのです。

**地域を結ぶ** 福島県新地町に隣接する宮城県山元町(図1, 図2)も甚大な被害を受けました。しかし、被災地支援は福島県に集中し、山元町は顧みられず、放置されたまま取り残されました。皇太子ご夫妻が町を訪れ、ようやく支援が入るようになりました。齋藤緑さんは仲間と、情報が寸断された住民にいち早く、地域のできごとや連絡事項などを発信するためにFM放送「りんごラジオ局」を開設しました(図3, 4)。山元町の被害を見れば(山元町記録)、「りんごラジオ」が町民にとって闇に灯る光であり、いかに貴重なものであったかわかります。人的被害数は、死者615人(遺体未発見の死亡届15人を含む)、町内での遺体発見数674人、行方不明者2人(死亡届提出15人を除く)、重傷者9人(救急搬送分)、軽傷者81人(救急搬送分)でした。家屋への被害(平成24年3月2日現在)は、全壊2,217棟(うち流出1,013棟)、大規模半壊(534棟)、半壊548棟、一部損壊1,139棟でした。火災は発生しませんで

した。津波浸水区域は、浸水範囲面積 24Km<sup>2</sup> で総面積 64.48Km<sup>2</sup> の 37.2 %にあたります。推定浸水域にかかる人口は 8,900 人で全体の 53.8 % (平成 23 年 2 月末現在人口) と、半数以上の人が被害に遭いました。

齋藤さんは、愛用していた車を流され、不便を強いられています。「通勤や生活・活動の足だったのに!」。「ラジオ局」には、子どもたちが遊びに来て、気ままに過ごし、

屈託のない笑顔を見せてくれます。そんなとき心が和み、ほっとすると齋藤さんは話してくれました。彼女が仲間とともに、混乱の中で迅速に地元に密着した活動を作り出し、住民に必要な日常の情報をいち早く提供したことは、誰にでもできることではありません。「りんごラジオ」が、住民の心をつなぎ、地域としてのまとまりと安定を維持する大きな役割を果たしました。



図 3 ボランティアの仲間



図 4 放送中の齋藤さん

被災地で話を伺うなかで、地域社会を失う深刻さや避難所生活の困難等、ことばにできない問題や苦労があることを知りました。海岸沿いには、道路脇に瓦礫の山が散在し、一帯が水に浸かり被害が大きかったことを物語っていました。すでに操業を開始している会社や事業所もあり、人々の生きるたくましさを強く感じました。

**もう一つの過酷な現実** 巨大な津波が東北太平洋岸の広範な地域をのみ込み、壊滅状態に陥れました。災害を必死に逃れ、九死に一生を得て、地域の再生に立ち上がる人々にたたみかけるように襲いかかり、今なお深刻な被害を与え続けるもう一つの過酷な現実があります。福島第一原子力発電所の爆発事故による放射性物質の拡散です。東京電力と政府により「冷温停止」が宣言されましたが、原子炉が安定的に冷却され、安全な状態にあるわけではありません。今でも原子炉の内部がどのような状態にあり、溶融した燃料がどこにあるのかさえ把握できていません。生命に危険なレベルの放射線下で、放射能防御と施設修復の作業を進める方々に感謝申し上げます。彼らの力なくしては、再び原発は暴走し、日本ばかりか地球全体の汚染・破壊が起こる

と考えるからです。世界中の研究者・専門家の知恵と技術を集めて、何としても崩壊寸前の原発を安全な状態に修復してほしいと思います。

被災地の復興支援に福島県相馬市を訪れた大阪府泉佐野市青年団協議会メンバーの活動は、写真洗浄やネガからのアルバム作成など遺留品整理や瓦礫の撤去作業でした。高い放射線量の中での作業でした。「宿舎内でも放射線量 0.5 マイクロシーベルトを示し、一日中窓も開けられない状態だった」。瓦礫の撤去は、「放射能の警戒を強いられる」仕事だったと、彼らは語っています (5, p.7)。

原発周辺の自治体は、「除染」により住民の帰村を実現し、地域再生を図りますが、放射能汚染は依然として深刻です。「除染」して放射性物質を他所へ流すか、貯蔵し埋蔵するしかありません。大量の汚染物質を安全に処理できる場所はなく、地中に埋めたとしても長い間には放射性物質が浸潤・流出し、地下水や環境を汚染する大きな危険があります。首都圏の自治体が処理している、焼却灰や浄水場の汚泥からも高濃度の放射性物質が検出され、保管場所もなく、一時貯蔵は限界状態にあります。汚染源の



---

福島第一原発敷地内には、さらに膨大な量の高濃度汚染水や集積物が蓄えられ続けており、日増しに増加しています。高校2年の女子生徒は、作文集の中で被災地への支援の遅れや、解決が見通せない原発事故に対する不安を綴り、「何が起こっても頑張っていきたい」と結んでいます（NHK NEWS WEB, 2012年3月7日）。事故の根本的な解決策も見いだせず、応急的な「対処療法」で立ち往生している現実、原子力発電の完全な破綻を示すものです。

**「放射能」の脅威の中で** 福島第一原発は、「冷温停止」とはほど遠い現状にあることは誰の目にも明らかです。福島県の2月の「定時降下物質環境放射線量測定結果」には、多いときは（2月15日9時～16日9時）349MBq/Km<sup>2</sup>のセシウム（Cs-134とCs-137合計）が記録されています。土壌からは、プルトニウムも検出されています。放射性物質は依然として放出され、拡散し続けているのです。被曝の脅威は、福島県に限らず、東日本全域に及んでいます。首都圏にも高濃度の放射能汚染地が散在しています。「微量だから、暫定規制値以下の測定値だから安全だ」、とはいえません。あくまで基準は暫定であり、緊急対応で許容した値です。基準を緩めなければ私たちが食べるものも、住む所もなくなるからです。

「厚生労働省は、…食品から検出される放射性物質の量が少なくなっていることなどから、…被ばく量の限度の目安を現在の5分の1の年間1ミリシーベルトに引き下げ…、「一般食品」の放射性セシウムの基準値は、暫定基準値の5分の1に当たる、1キログラム当たり100ベクレル、成人より放射線の影響を受けやすいと指摘されている子ども向けの「乳児用食品」と「牛乳」は50ベクレル、摂取量が多い「飲料水」は10ベクレルとする」（NHK NEWS WEB, 2011年12月20日）。許容範囲の縮小は、規制の強化であり、「従来の基準値では安全ではなく、健康に有害である」との宣言に他なりません。特に重要なことは、研究者によって放射線の人体への影響に関して「閾値」の有無や有害性の解釈に決定的な違いがあることです。私たち市民の不安を増幅させる最大の原因の一つは、低レベルとはいえない放射線に曝される現実を無視

した、研究者や専門家の「安全宣言」です。チェルノブイリ原発事故の報告や放射性物質による内部被曝に関する医学的研究などから、人体への放射線の有害性に閾値はないことが明らかにされています（6, 7, 8）。安全性を最優先にした客観的で公正な放射線の有害性の評価が求められます。

放射能汚染は、健康を蝕むと同時に、人と人との間を引き裂き、結びつきを切断しています。「あの原発事故さえなければ、幸せな日々が続いていたはずだった。東日本大震災の後、福島県二本松市から兵庫県内に妻と娘と避難してきた男性（38）が、昨年末、最愛の2人を残して自ら命を絶った。仕事を失い、兵庫で再起を期したが、将来への不安を拭えずうつ病を発症。残された遺書には『現状に打ち勝つ気力がもうない』と殴り書きされていた」（神戸新聞, 2012年3月7日）。一瞬にして世界を崩壊させ、今も「一触即発」状態にある原発を抱え、私たちの生活・世界は、「破滅」と背中合わせだといっても過言ではないでしょう。

**生活・世界をとりもどす** 住み慣れた地域を離れて避難生活をするすることで、住民相互のつながりが切れ切れになり、家族のまとまりも危うくなってしまう。私たちは人と関わり、それぞれに独自の人間関係の広がりをもっています。被災者ひとり一人が築いてきたかけがえのない人間的つながりと交流、そして親しい人々への思いは、その人特有の個性的な世界を作り、張りど活気のある日々を生み出してきました。私たちは、自分にしかない私的な精神世界を作り出しているのです。家族や地域住民が離ればなれに生活することになれば、その人固有の「社会」を崩壊させ、生き生きと暮らすことを難しくしてしまいます。

被災した青年はこう語ります。「私のまわりでも…改めて地域や仲間との集団活動、協力することの大切さを見つめ直した人々もいた。同世代のお父さんやお母さん方との定期的な集まりや会合が増え、集まった大人で何がしかの地域で活動しながら、楽しく生活していけないか、という意見も出されている。一番大切なことは、住んでいる地域で自身の居場所を見つけ、1人で行動するのではなく、大勢の人々と行動をとるにしていこうという意識を自分自身の中に

持つことだと思う」(9, p.64)。多くの地域が消え、人々が行き交い、近所づきあいのある暮らしがなくなっていました。「原発周辺の住民だった人々は、未だに、どんな状況下でも自宅に帰りたいと叫んでいる。自宅のみならず地域に帰りたいのだろう。地域のあんな顔、様々な顔に会いたいのだろう。でも今は戻れない。いや永遠に戻れないかもしれない。避難されている人々は今こそ、故郷の住み慣れた地域の大切さを噛み締めているはずである」(9, p.64)。

原発事故の影響は、日増しにそして年を追うごとに私たちに重くのしかかってきます。新たな日常世界を少しずつ作り広げるためにも、住民が親しく関わり合えるように地域の環境を整えることが必要です。

**科学とは何か** 「空をこえて ラララ 星のかなた、行くぞアトム ジェットのかぎり、心やさしい ラララ 科学の子、十万馬力だ 鉄腕アトム」、鉄腕アトム主題歌(作詞・谷川俊太郎 作曲・高井達雄)の歌詞です。鉄腕アトムは、1950年代に登場した手塚治虫漫画の人気キャラクターです。当時、最新の原子力(アトム)をエネルギーとしたロボットが鉄腕アトムでした。「原子力の平和利用」が推進された背景には、アメリカ政府が世界規模に大々的に展開したキャンペーンがあったといえます(浅井基文、沖縄タイムズ、2011年8月11日)。原子爆弾・キノコ雲に対する恐怖と否定的・破壊的なイメージを払拭するための働きかけでした。「鉄腕アトム」もまた、原子力を人類の幸福と平和のために活用した正義の使者だったのでしょうか。歌詞にもあるように、アトムは「科学の子」であり、彼の原動力は、人類への危険や環境汚染を惹起する恐れは微塵もない、「理想的にクリーンな」核エネルギーを源としていました。

私たちは「科学」ということばをよく使います。3.11 東日本大震災・福島原発事故は、「科学」の力で作り出した文明社会とその利器を破壊しました。さらに深刻なことに、人類に幸福と平和をもたらすはずだった「科学の子」アトムが、私たちを「破滅」の淵に立たせています。ある現象について客観的事実に基づいて、矛盾なく説明できること、誰もが納得する前提と手続きを用いて事象の生起過程を説明できること、第

三者が同様の条件と手続きを用いて同じ現象を再現できること、等々「科学的」であることの条件はいろいろあるでしょう。科学は、細々とした仮説や理論の断片から成るのではなく、全体として一貫性・統一性のある構造を持つ理論を基礎にするといわれますが(10)、定義は確定してはいないようです。湯川秀樹と梅棹忠夫(11)は、「人間にとって科学とは何か」と問うています。物事を「科学的」に明らかにすることと人間にとっての「善し悪し」の評価は別であること、科学は無目的に進展すること、特定の科学者や科学者集団を超えて科学は発展すること、現代の科学がすべてを説明するものではないこと、などが語られています。

科学と人間の関わりについては、次の指摘もあります。「科学はすべての分野に浸透している知識の偏りや不正確さから自由ではない…。科学的真理とは…論争の余地のない結果ではなく、これらのすべてが不完全で、偏っていて、不正確で、不確実であるかもしれないような、多くの異なった演目や役者、舞台からくり、進行、からなる相互演出によって組み合わせられたものである」(「ブラックボックス」と呼ばれる)。歴史のどの時期であっても、科学者に受け入れられているものは「ブラックボックス」の体系からなる世界観であるといえます。この「ブラックボックス」に多くの知識が詰め込まれるにつれ、科学者がそれらの構造物の諸要素を解きほどこいたり、複雑に絡み合った体系を批判したりすることはいっそう困難になります。そして、放射線リスクの科学は、完全にそのような「ブラックボックス」になっているというのです(8, 2011, pp. 70 – 71)。

科学が絶大な力を持つ今日、「人間にとっての科学とは何か」を真剣に考えてみる時期にきているのではないのでしょうか。とりわけ、今大学で学ぶ学生の皆さんには、とらわれのない眼で生活や科学について考えてみていただきたいと思います。

皆さんにとってはどのような一年でしたでしょうか。武蔵野11号では、「大震災から1年経た今」と、「埼玉大学と地域の文化との関わり」の2つに焦点を当てて幅広

くご寄稿をお願いしました。齋藤緑さんには、大地震と大津波に襲われた宮城県山元町での地域活動とご自身の生活を通して、震災からの1年を振り返っていただきました。鎌田諒さん（教養学部3年）には、都市に残る貴重な緑地「見沼たんぼ」で新たな活動を生み出す埼玉大生の活動を紹介していただきました。澤田茉那美さん（経済学部4年）には、見沼たんぼにまつわる伝説・逸話を現代版の紙芝居に再現する創作活動を紹介していただき、見沼が豊かな歴史と文化をもつことを示していただきました。野村有里さん（考古学研究会）は、埼玉大学が貴重な埋蔵文化財の上に立っていることを、考古学的な視点から紹介し解説していただきました。埼玉大学周辺には、貴重な埋蔵文化財がたくさんあることに驚かれることでしょうか。「けやきの窓」では、誰もが手にする学校の教科書が、その後の人生に大きな影響を及ぼす作家との出会いの契機になることを、重原孝臣先生（理工学研究科）に語っていただきました。「出会い」のおもしろさを新鮮な感覚で受けとめられることと思います。図書館からのお知らせとして、「館内での飲料水補給の今後のあり方」の提案、「リポジトリ説明会」実施のご報告、そして今年1年間の埼玉大学図書館の活動のご報告を掲載いたしました。

（注）掲載の写真はすべて齋藤緑さんに提供していただきました。図1は筆者作成。

#### 引用文献

1 岩崎大輔（登米市） 東日本大震災を経験して（「生きる～東日本大震災と地域青年の記録～」編集委員会 2012 「生

きる」～東日本大震災と地域青年の記録～第1号（暫定・全国青年問題研究集会版所収）

2 橋詰琢見（陸前高田市・北上市） 東日本大震災手記（出典は1と同）

3 泉田将治（陸前高田市） 東日本大震災手記（出典は1と同）

4 高橋弘則（気仙沼市） 大震災から学んだ地域のつながり（出典は1と同）

5 西野 茂（泉佐野市青年団協議会） 3.11を経験した私たちにできること（2011年度 全国地域青年「実践大賞」報告書 日本青年団協議会）

6 ユーリ・I・バンダジェフスキー 2011 放射性セシウムが人体に与える医学的・生物学的影響 ―チェルノブイリ原発事故被曝の病理データ（久保田護訳）合同出版

7 ベラ・ベルオーク／ロジェ・ベルオーク 2011 チェルノブイリの惨事（櫻井醇児訳） 緑風出版

8 欧州放射線リスク委員会（ECRR）編 2011 欧州放射線被ばくによる健康影響とリスク評価 ―欧州放射線リスク委員会（ECRR）2010年勧告 明石書店

9 吉田恵三（会津若松市） 東日本大震災以後の行動記録と感じたこと（出典は1と同）

10 A.F. チャルマーズ 1983 科学論の展開―科学とは何か？（高田紀代志・佐野正博訳） 恒星社厚生閣

11 湯川秀樹・梅棹忠夫 1986 人間にとって科学とは何か 中央公論社

（図書館長 坂西友秀）

## 震災を経て

まもなく、あの大地震から10ヶ月が経とうとしています。とにかくこの10ヶ月間必死に時間を過ごしてきたという感じで

す。この間様々な経験をし様々な感情を味わいました。毎日利用していた駅が流され生活が一変してしまいましたが、できるだ



け、深く考えず平常心で・・・というか、今までと変わらないような生活をしているように装っていますが、突然、経験したことのない感情に襲われる事があります。その時はどう対処していいか一瞬戸惑います。例えば、私の町はとても小さい町ですが、震災後怖くて一度も行っていない場所がたくさんあります。先日、国道の工事が始まり、渋滞していたので迂回しようと横道にそれたら震災後初めて通った道で、記憶にあった景色と違って、一瞬頭にパニックになり、急に涙が溢れて来ました。10ヶ月経って、このような感情に一瞬で襲われるとは思っていなかったので自分にびっくりしました。このような心の影が潜ん

でいるのかと怖くなったのと同時に、私以上に変な思いをした人々の心の中はどうなっているのだろう・・・と考えてしまいました。自分自身に「忙しくて時間が無いので町内の様々な場所に行けないのだ」と言い訳をしています・・・。」仕事と災害FMのボランティアで丸々一日お休みをした日はこの10ヶ月間の片手ほどの数日しかありません。疲れないかと心配してくださる方も多いですが、私にとってはその方が精神的に救われるのです。何もせずに家にいる事は大変な被災をした方に申し訳ないような気になるからです。私自身も車を流され被害があったのですが、それを悲観する事は憚られる感じがするのです。



1階を津波にさらわれた家



ボランティアのみなさん！風呂・宿泊情報

3月末に職場に復帰をしましたが、それまでとてもよい人間関係でお仕事させていましたが、あまりの被害の違いの温度差に、同僚の日常的な会話を聞いているのが、夏ぐらいまでかなり辛かったです。また、被

災地以外の方に被災地以外で会うことが怖かったです。なので、こちらに会いに来てくださる友人・知人にはははとても救われました。



山元町震災報告（ザールブリュッケンの教会で）



お礼の気持ちを込めて「五円」を

年末の12月22日から1月4日までドイツに行きました。20年ほど前から交流があったのですが、今回震災で山元町に義捐金を集めてくれているザールブリュッケン市にある教会の財団に直接お礼を言うためです。28日の夕方に山元町デーということで報告会を開いて頂きました。被災状況の報告をさせていただき、お礼の気持ちを込めて、日本の五円を一人一人に配らせて頂きました。五円と御縁の意味も説明して渡すとともに喜んでくれました。そして「忘れかけていたけれど、まだあなたの町は大変な状態が続いているんですね。これから応援します。頑張ってください。」とたくさんの方に励ましの言葉を頂きました。

また、私がお世話になっている立子・ヴィガードさん夫婦がお世話したコソボ難民の方が、震災後2日後に黒服を着て、「あなたの母国が大変な事になっているので使ってください。」と義捐金を届けてくれたそうです。ドイツに住んで、朝4時ぐらいから夜遅くまで安い時給で働いているという事です。それなのに、その方たちにとっては多額のお金を届けてくれたのです。私はその方のうちに直接お礼に行くと、とても喜んでくれて、今度は夕飯に招待していただきました。夕飯に行くと、心を込めたコソボ

料理を準備してくれていました。そしてコソボで目の前で家族が殺されたり、たくさんの爆弾が落ちてきたなどの大変な経験を話してくれ、だからこそ、今回の震災で心が傷ついた皆さんの気持ちが良く分かると話してくれました。

それから、隣町の角田市出身でフランクフルト在住・ルフトハンザ航空に勤めている方が、山元町に何度もボランティアに来てくれました。あまりの震災の大きさに、いても立つてもいられなくなり、お休みを取ってボランティアに来てくださり、ルフトハンザ航空にもお願いして、フランクフルトで街頭募金をして下ったそうです。ドイツでは街頭募金はめったに無いそうで、集まるかどうか心配だったが、震災のニュースは衝撃だったようで、たくさんの方が来てくれたそうです。その中に、街のくず集めをして生計を立てているおじいさんが、手のひらにコインを握り締めて来てくれたそうです。「これは僕にできる精一杯の気持ちです。少ないかも知れませんが、今日一日働いてもらった賃金の全てです。日本の皆さんに届けて下さい。」というお話を聞きました。本当にたくさんの善意を頂いているんだなあと感じます。



りんごラジオに出演した足利市のボランティア中学生と仲間たち



放送風景

なかなかメディア等で紹介される事が少ない「山元町」ですが、その山元町をめざして全国各地からボランティアに来てくださる方もたくさんいます。今まで、山元町の知名度は全くなく観光に来る人はほとんどなかったのですが、このような形ですが、山元町に来てくださる方がいるという事に感

謝しても感謝しきれません。社会教育に携わった事のある方々は、他の方よりもメディアの映像等をみて心を痛めている方が多いかと思われます。遠くに住んでいるかつて一緒に活動した仲間からも「何でも言って。」「欲しいもの必要なものがあったら連絡して。」と暖かい声をたくさん頂きまし

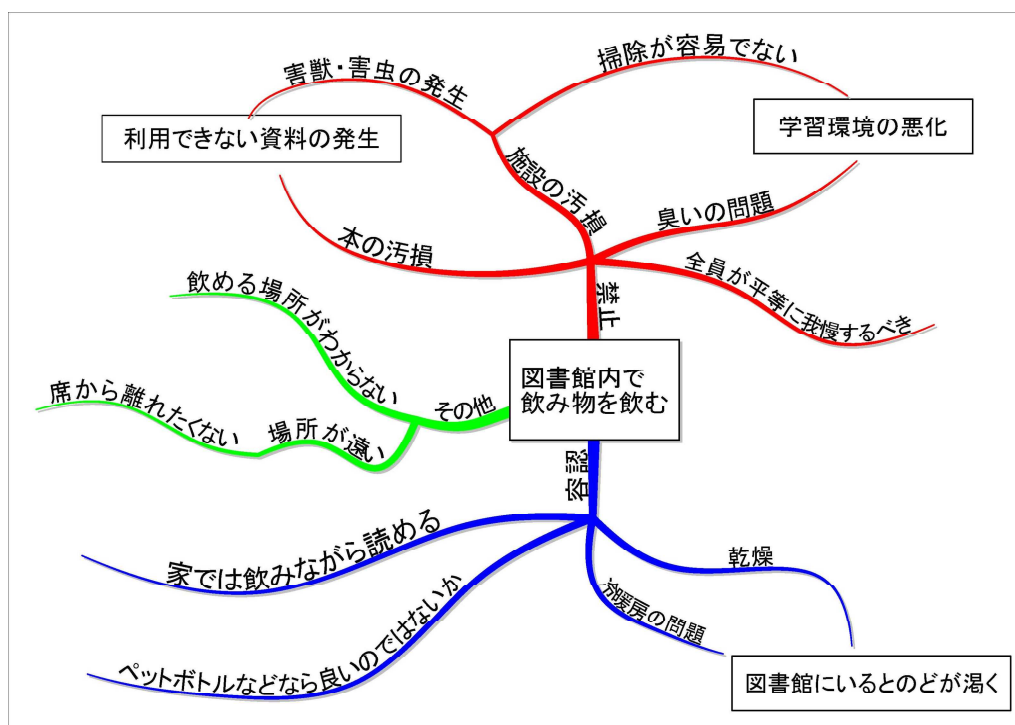


た。本当にありがたいのですが、被害が凄過ぎてどこから手をつければよいか気が遠くなり、何をどう頼れば良いか思いつきません。極端な話、何も無くなってしまった方がかなりたくさんいますのでなんでも支援になると思います。それぞれが被災者の方の立場になって考えて、自分のできる支援を少しでもしていただく事が大事だと思います。被災地が一番恐れている事は忘れ

られる事です。忘れられずに細くても長くご支援いただけることが被災者にとって力になると思います。とにかくできることを復興までにはまだまだ時間がかかると思いますが、私も一日一日できることを地道にやっていきます。

(宮城県山元町・元日本青年団協議会副会長  
齋藤 緑)

## !!! 図書館をより過ごしやすい環境に !!! - 「水分補給」に関するご意見募集 -



図書館には、館内での水分補給を容認してほしいという意見が寄せられます。上記の図は図書館での水分補給に関する意見等を簡略的にマップ化したものです。

近年、図書館内で水分補給のできる大学図書館もあり、必ずしも水分補給に関して消極的な態度をとる必要はなくなっているのかもしれませんが。

しかし、水分補給にともない発生するデメリットや守らなければならないルール・マナーがあることは忘れてはなりません。

これらのことを踏まえつつ、皆さんの意見を伺いたいと思います。「図書館へ一言」などを通じて、ご意見をお寄せください。直接のご意見もお待ちしております。

(情報サービスチーム 成田 義樹)

# 考古学研究会の歩み

## 考古学研究会の歩み

こんにちは考古学研究会です。

突然ですが埼玉大学が古代の遺跡の上に建てられた大学であることはご存知でしょうか？

埼玉大学が位置するさいたま市大久保地域一帯は荒川左岸の沖積地にあたり荒川の度重なる氾濫により旧河道、自然堤防、後背湿地などの地形が形成されています。このうち微高地である自然堤防上には、弥生時代中期から近世にいたる遺跡が数多く分布しています。埼玉大学内に存在する本村遺跡もその1つです。

本村遺跡は、大学移転が進行中であった1967年に考古学研究会の学生が移転工事区域内で弥生時代や古墳時代の土器片を採取したことにより発見された遺跡です。本村遺跡の存在により、1967～1969年に大学移転工事の進展に合わせて、4回の発掘調査が行われました。



図1 埼玉大学構内本村古墳  
人の背後に見える土盛りが古墳墳丘  
(本村遺跡第2次調査：1968年4月)

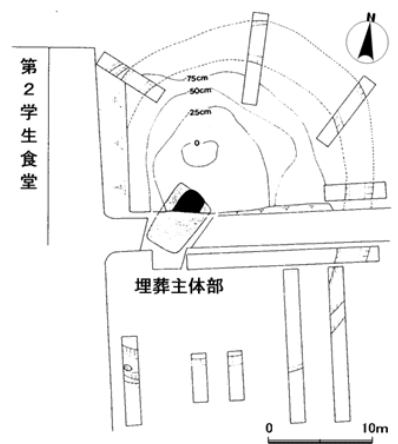


図2 本村古墳全体図

発掘調査の結果、弥生時代中期～古墳時代後期の住居跡27基、古墳時代前期の大型ピット群・溝、古墳時代後期の円墳1基などが検出され、土器・須恵器・ガラス玉・刀の鞘の金具などの多数の遺物が出土しました。大学移転に伴う調査は、予想以上の成果をあげ、この地域における弥生時代中期～古墳時代後期の実態が明らかにされました。また、これらの本村遺跡の発掘は、荒川下流域の低地遺跡に対する最初の調査であり、考古学史における価値も極めて高いものです。その後も、1985年に大学院政策科学研究科棟や電気電子システム工学科2号館などの新校舎設立にともなって発掘調査が行われ、奈良時代～近世の建物跡・井戸・溝などが確認されています。本村遺跡は浦和遺跡調査会によって大学外の西側にまで伸びることが明らかになっています。これらの大学移転・校舎新設にともなう出土資料の多くは埼玉大学で保管しています。現在、本村遺跡から出土した資料のうち、弥生時代を中心とした一部を埼玉大学内の図書館入口に展示しております。図書館を利用する際にはぜひご覧ください。



図 4 目沼瓢箪塚古墳出土埴輪



図 3 本村遺跡出土の弥生土器

本村遺跡以外にも 1952 年に埼玉大学によって調査された目沼瓢箪塚古墳出土資料や埼玉大学教養学部教授であった三友国五郎先生寄贈の三友コレクション等の貴重な資料が埼玉大学には所蔵されています。目沼瓢箪塚古墳や三友コレクションがどのような資料かを簡単に紹介します。目沼瓢箪塚古墳は埼玉県北葛飾郡杉戸町に存在する 6 世紀に築造された古墳です。埼玉大学文理学歴史学研究室が 1952 年に発掘調査を行いました。1950 年の文化財保護法施行後、埼玉県内で最初に行われた前方後円墳の学術調査としても学術的意義が極めて高い調査であり、墳丘の周囲に巡らされた円筒埴輪列が良好な状態で検出され、当時の学界の注目をあつめました。



図 5 目沼瓢箪塚古墳で検出された埴輪列

三友コレクションは、三友国五郎先生が福岡県、朝鮮半島、南西諸島でフィールドワークを行い、研究する過程で採集された考古遺物の一部です。三友コレクションのなかで特に貴重なのは、現在の朝鮮民主主義人民共和国の平壤で採集された紀元前 2 世紀～7 世紀にあたる瓦です。目沼瓢箪塚古墳や三友コレクションも今後積極的に公開していきたいと考えています。

さて、現在の考古学研究会は、2011 年から新しく埼玉大学教養学部に着任した中村大介先生のもと活動を行っております。考古学研究会の活動のなかで重要な活動の一つに一般の方や学生に対しての遺物を展示し、紹介するということがあります。2011 年 11 月 3～5 日に行われた第 62 回むつめ祭では、教養学部棟内で中国雲南省やタイなどの東アジアの土器を展示しました。中国雲南省やタイなどの東アジアの地域では現在でも土器がつくられ、現地のレストランでは土器を食器につかうことがブームです。中国雲南省やタイの東アジアの土器は、日本の弥生時代や古墳時代に作られた土器とおなじ製法が現在まで残っています。そのため、東アジアの土器や土器製作の工程を記録・紹介することは昔の日本の土器にたいして理解を深めるのに大変意義があります。むつめ祭では、東アジアの土器・土器製作の道具・製作工程の動画・解説パ



---

ネルなどを展示し、展示物の多くを来場者が実際に手にとって観察できる形にしました。

---

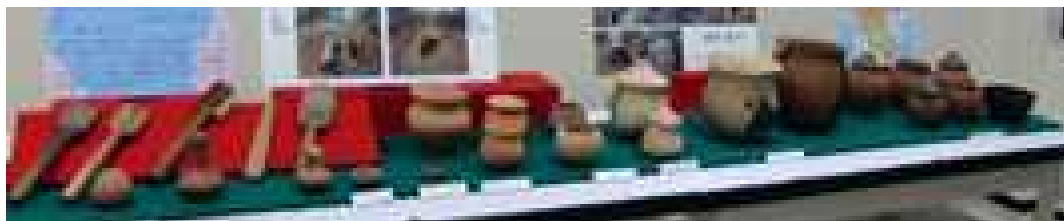


図7 2011年 むつめ祭  
東アジアの土器・土器製作の道具展示

---

本村遺跡の資料など発掘などによって出土した考古資料を実際に来場者の手に観察してもらうことはできませんが、今回の展示の資料は中村先生が東アジアの現地にいったて採集して来たものを中心のため直接手にとって観察していただきました。来場者の皆さまは、現地で土器が現在でも実際に使われていることに驚かれ、現地でどのような人が土器を製作しているか、土器製作道具の使用法など積極的に質問をして、興味深く展示を見ていってくださいました。結果として、むつめ祭の3日間で約230人の来場者が考古学研究会の展示にいらっしゃいました。テレビ・新聞等の媒体によって一般的には考古学は何がわかったかというよりも、どんな凄いものが出土したかということが注目されてしまいがちになります。しかし、考古学は実際には地味な作業の積み重ねで、例えば1つの土器を観察して表面をどのようにして綺麗に整えたりといった製作の過程などを観察し、その土器がいつの時代にどのようにつくられたりといったことを判断します。そして、土器から製作された時代の土器製作技術の伝播や製作地からの土器の流通関係を探ることで土器が製作された時代の様相を復元します。むつめ祭の展示では、来場者に土器を手にとって観察してもらい、考古学研究会の学生が来場者に解説することで、実際の考古学のイメージを来場者に少しでも伝えられたと思います。今後も考古学研究会は、このような展示会を開催したいと思います。

---



図8 2011年 むつめ祭  
東アジアにおける土器製作の映像記録



図9 春の遺跡踏査  
考古学研究会&中村大介先生

---

すので機会がありましたら見に来てください。

考古学研究会の活動は展示のように、考古学の魅力を伝えることの他に博物館や遺跡を訪れ、知識を深めるといった活動もしています。ちょっとでも興味をもたれたら、考古学研究会を訪ねてみるか、展示を見に来てください。今後とも考古学研究会の活動をよろしくお願いします。

(考古学研究会 野村友里)

---

# 機関リポジトリSUCRA説明会

インターネットなどを利用しパソコン画面上で資料の検索・閲覧が容易になった現在、図書館は利用者と書き手を結びつけようと様々な活動をしています。中でも大学図書館には、先生方の教育研究活動をサポートし、その成果を収集・保存・公開する役割があります。

『武蔵野』第2号で紹介されていますように、埼玉大学には「機関リポジトリ SUCRA」があります。平成20年3月に一般公開され、同年11月からは埼玉県内の複数機関と共同で運用されています。機関リポジトリ (Institutional Repository) とは、教育研究成果を保



存・蓄積・管理し、インターネットで学内外に無償公開する電子アーカイブシステムを意味し、情報ネットワークを通じて世界中どこからでもアクセス可能です。ここには図書館にずらりと並ぶ本として出版される以前の、書かれて間もない研究論文を含む、様々な過程にある学術成果物が収められています。この度図書館では、この「機関リポジトリ SUCRA」をより活用していただくため、説明会を企画しました。その第一回目として、昨年11月25日に国際交流センターで開催しました。

会場では PowerPoint を用いてご説明しました (スライド参照)。文書に関しては基本的に PDF ファイルで公開しますので、なるべく CD-R などの電子媒体、あるいはメール添付での提供をお願いしています。文書ファイルの形態 (Word、一太郎、PowerPoint など) は問いません。またその際、書誌事項 (雑誌論文の場合、掲載誌名・巻号・出版年など) もご連絡いただけると幸いです。

インターネットで公開されるため、著作権など様々な制約があり、いただいた資料全てを公開することは難しいのが現状です。リポジトリを通してひとりでも多くの方々に最新の研究が日々生み出される大学を身近に感じていただけるよう、図書館はこれからも活動을続けて参ります。これまでのご理解ご協力に感謝申し上げますとともに、先生方の論文を読みたいと待ち望む多くの方々へ、埼玉大学内の教育研究成果物を公開できるよう、リポジトリへのコンテンツ提供をどうぞよろしくお願いいたします。こちらからお伺いする形での説明会も承りますので、ご要望等ございましたらお気軽にお問い合わせください。

(情報サービスチーム 岩崎 真美)

お問い合わせ先  
 図書情報課 情報サービスチーム  
 TEL 048-858-9640(内線 5003)  
 E-Mail [sucra@mail.saitama-u.ac.jp](mailto:sucra@mail.saitama-u.ac.jp)



# けやきの窓



## 教科書で出会った作家たち

### 1. はじめに

私は学生時代には物理を学び、現在は情報システム工学科で教育研究に携わっています。根っからの理系人間で、自ずと手に取る本は昔から数学や物理や情報に関わるものが中心でした。学生時代も文系科目を熱心に学んだ記憶は、正直に申し上げて、あまりありません。高校時代の「国語」や大学時代の「外国語」も、必要に迫られてそれなりに勉強はしましたが、興味をもって真剣に取り組むということはあまりありませんでした。それでも、たまたま「国語」や「外国語」の教科書のなかで出会った作家のなかに、その後の私の感性や価値観に影響を与えた人が何人かいるので、そのうち三人を取り上げて小文を書いてみたいと思います。なにぶん昔のことで記憶違いがあったり、そもそも文学や評論についてはずぶの素人なので、私の思い込みや誤解にもとづく記述も多々あるかもしれませんが、ご寛容をお願いします。

### 2. 中島敦

第一は中島敦（1909－1942）。高校時代に国語の授業で「山月記」に出会って衝撃を受けました。山月記を読んだ方は多いと思います。詩人になり損ねて人喰い虎になってしまった男の話です。文庫本にしてわずか十頁程度の短編ということもあって、教科書でも全文が取り上げられていました。一読して作家の日本や中国の古典に対する素養の高さは感じましたが、難しい背景はともかくとして、超現実的なストーリーを淡々と無駄のない端正な文章で綴る表現力に圧倒されました。格調高雅（この言葉も山月記で学びました）、それでいて、たとえば三島由紀夫に感じるような冷たさがなく、人間に対する作家の純朴な愛情が根底に流れているような気がして、中島を身近な存在に感じました。

中島はわずか33才で亡くなったことも

あって決して多作な作家ではありません。全集もわずか3巻で、主要な作品はちくま文庫一冊にほとんど収められています。この文庫本は私にとっては生涯大切な一冊です。今でも旅行に出かけるときなど、必ず持ってでかけています。（私は電話を携帯するより本を携帯する方が好きです。）最近よく読み返している作品は「悟浄出世」です。悟浄は小説「西遊記」に出てくる沙悟浄のことです。「悟浄出世」では、悟浄が三蔵法師に出会い、弟子入りするまでを描いています。悟浄はもともと河のなかに住んでいた愚図な妖怪（ばけもの）ですが、「自己とはいったい何か？」という問を深く追求するあまりに、現代で言う鬱病にかかってしまって、救済を求めて河のなかに住む妖怪の「哲学者」たちに訓言（おしえ）を乞うために旅を続ける、といったストーリーです。悟浄は「訓言は薬のようなもので、瘡（おこり）を病む者の前に腫（はれもの）の薬をすすめられてもしかたがない」とも思いつつ遍歴を繰り返すなかで、肉体的にも精神的にも疲れ果ててしまうのですが、最後に夢のなかで観音様に救われて三蔵法師との出会いに導かれるのでした。悟浄出世に登場する「哲学者」たちは、神を説く者であったり、自然との調和を説く者であったり、快楽を追い求める者であったり、あたかも人間世界を象徴する様々なタイプが登場します。それぞれが一理ある至言を悟浄に伝授します。私のお気に入り「愛するとは、より高貴な理解のしかた。行なうとは、より明確な思索のしかた。」というフレーズ。こうした、何気ない表現でありながら、よく考えると意味深長な至言がいたるところに散りばめられています。ちなみに、このフレーズ、私の研究室に一時張り出していたことがあるのですが、学生さんの受けがよくなかった（真面目すぎるのでしょうか）、外してしま



---

いました。

三島由紀夫（1925－1970）のこと、冷たいと書きましたが、三島も私の好きな作家の一人です。新潮文庫の三島作品はほぼ読破しました。（内容はほとんど覚えていませんが。）「英霊の声」や最後の四部作「豊饒の海」には特に感銘を受けました。豊饒の海には、ワーグナーの楽劇「リング」にも通じる巨大な時空の広がりを感じます。三島が市ヶ谷の自衛隊で割腹したのは豊饒の海の脱稿直後のことでした。

### 3. 加藤周一

第二は加藤周一（1919－2008）。「日本の庭」という小論が高校時代の教科書で取り上げられていました。竜安寺（りょうあんじ）の石庭と修学院離宮の対比や桂離宮のことが論じられていたように思います。詳しいことは覚えていませんが、印象に残っているのは、日本の庭は日本の自然の美しさを究極まで極め、その極みにおいて、日本という特殊な世界の限界を超越して普遍的な世界に通じている、という主旨のことが主張されていたことです。これは人の生き方に対しても応用の効く考え方だと思っています。世の中には「偉人」と誰もが認める、多くの人々の共感を得る普遍的な価値を築いた人がいますが、我々下々の民がその域に一步でも近づくにはどうすればよいか？ 私なりの答えは、自分という「個」を徹底的に磨くこと。「個」の徹底的な追求以外に「普遍」に通じる道はないような気がしています。「日本の庭」との出会いで、そのことを学びました。音楽の世界でいうと、武満徹さん（1930－1996）がまさにこのタイプの芸術家の典型だと思います。武満さんに興味があったら、たとえば尺八と琵琶とオーケストラのための「ノベンバーステップス」を聴いてみるのをオススメします。

加藤さんの著作のなかで忘れてはならないのは「日本文学史序説」でしょう。（告白しますが、この大作、私は最後まで読みきれておりません。）日本文学に限らず、日本文化を語るにあたって侘（わび）や寂（さび）は避けて通れない概念ですが、こうした概念は日本人にとっては **trivial** であっても、外国人にとっては明らかに

**nontrivial** です。「あうんの呼吸で・・・」といったことも（最近では日本でも忌み嫌う風潮があるようですが）、日本人ならば、その意味することはただちに感じとることはできますが、外国人には（特に欧米系の人々には）ありえないコミュニケーションの形態でしょう。加藤さんは、こうした日本的な言わば曖昧な概念を徹底的に分析し、客観的に言語化することで、仮に外国人であっても「序説」を読めば日本的な曖昧な概念の真髓が理解できるようにしました。「序説」は、今では英・仏・独・伊・韓・中・ルーマニアなどの言語にも翻訳されているそうです。ちなみに、加藤さんは世界各国の大学で教壇に立たれた方で、噂によれば、ご自身（日本語の他に）少なくとも英語、仏語、独語、伊語は堪能であられたとのことでした。

その後、加藤さんの著作を手にとる回数はそれほど多かったわけではありませんが、京都で開催された（私の研究に関わる理系の）学会に参加したとき、街を歩いていたら、立命館大学で加藤さんの講演会があることを告知するポスターをたまたま見つけて、学会を抜け出してもぐりで参加したこともありました。また、加藤さんは、生前、朝日新聞に「夕陽妄語」という月一回のコラムをもっておられて、その時々話題を一つ選んで小文を書いておられました。政治や社会問題から宗教・歴史・芸術に至るまで、取り上げられるテーマは極めて多岐におよび、加藤さんがどのような話題を取り上げ、それに対してどのような見方をしているか、興味深く読んでいたのを記憶しています。その知識の広さ・深さは圧倒的で、しかも、それが百科事典的な断片的な知識ではなく、統一された文化的巨人といってもよい一人格が形成されていることに感心しておりました。加藤さんは、医学部の出身ということもあってか、決して情緒的な表現を好む方ではないように思いますが、思考の根底には、人類の平和への希求が常にあったと思います。個人的には、加藤周一氏は、20世紀全体を通して五指に入る、日本の誇るべき文化人だと思っています。

---

#### 4. ホフマンシュタール

第三はフーゴー・フォン・ホフマンシュタール（1874－1929）。「チャンドス卿の手紙」という短編が大学2年のときの独語の教科書として取り上げられました。私の通っていた大学では英語以外に「第二外国語」として他の言語を学ぶ必要がありました。私は、父が独語の大学教員をしていたこともあって、独語を第二外国語に選択しました。今思うと独語の「ABC（アーベーツェー）」を習い始めて1年余の学生に「チャンドス卿」のような一級の文学作品を読ませて、語学の修得という観点からはいかほどの効果があるのか甚だ疑問ですが、当時はこうした「過酷な教育」は日常的でした。ほとんど暗号解読に取り組む状態の連続で、辞書と首っ引きで、行間は単語の日本語訳と、語と語の修飾関係を示す矢印の記号ですぐに埋め尽くされました。週1度の講義で、1週に1－2頁のペースで進むのですが、前の週の内容も忘れていたようなこともしばしばで、当然ストーリーもおえず、はじめのうちは苦痛以外の何物でもありませんでした。ただ、独語は厳密な文法に従って書かれているので、個々の単語の意味を理解した上で語と語の修飾関係を丹念に追うと、意味はほぼ理解できます。はじめは「不思議な記号」の羅列に過ぎなかった文章を、要素と仕組みを理解した上で何度か反芻してみると、何ヶ月かして、これは驚嘆すべき文学だということに気づきました。

物語は、文壇で名声を得た（架空の）文学者チャンドス卿がフランシス・ベイコンに宛てて手紙を書き（手紙そのものが作品になっています）、自分が文学活動を止めてしまったことへの弁明と、そこに至った精神的な過程の説明を行う、というものです。詳しいことは覚えていませんが、言語による表現の限界という、言語に内在する究極的な問題を、言語を用いて巧みに表現しているのが強く印象に残りました。たしか、ガス室に入れられた鼠の母子のシーンがあって、子鼠を守ろうと必死になる母鼠が最後の瞬間に絶望と諦めのなかで虚空の闇をうつろな眼差しで見上げる、といった描写がありました。（拙い表現で申し訳ありません。）チャンドス卿は、こうした微

妙なシーンや、あるいは、もっと日常的な何気ないシーンにこそ真の感動があるが、それを表現するのに言語はあまりに貧しい、といって筆をおくことにしたことをベーコンに対する手紙のなかで（言語を用いて巧みに）綴っています。「チャンドス卿の手紙」は、小説家にとどまらず、あらゆる分野の最良のクラスに属する芸術家が、最も高いレベルで、誰にも相談できずに孤独に悩む、その悩みの本質を的確に文章で表現したもののよう感じられました。文学の世界ではありませんが、旧ソ連の映画作家アンドレイ・タルコフスキー（1932－1986）の作品にも同じようなことを感じます。タルコフスキーほど映像美にこだわった作家はいないでしょう。タルコフスキーの作品（公開されたものはわずか8作）は全て見ましたが、1つのカット、1つのシーンに込める作家の血の滲むような思いがひしひしと伝わってきました。興味のある方には「ノスタルジア」がお奨めです。

ホフマンシュタールは何者なのか、学生時代はまったく知りませんでした。後期ロマン派時代に活躍したウィーンの作曲家リヒャルト・シュトラウスのオペラ「薔薇の騎士」「エレクトラ」「影のない女」などの台本を書いているのがホフマンシュタールだということを知ったのはずっと後年のことです。ちなみに、ホフマンシュタール自身、「チャンドス卿」を書いたのちは、美文を書くことはしなくなり、古典や散文の世界に入ってしまったようです。そのようなこともシュトラウスの傑作オペラが生れる背景にあったのですね。

今では独語はすっかり忘れていて、Wie geht es Ihnen? (How are you?), Auf Wiedersehen. (See you again.), Prost! (cheers!) くらいしか覚えていませんが、私にとってホフマンシュタールに出会えたことは独語を学んで得た（唯一？）最大の収穫でした。

#### 5. おわりに

理工系の学生諸君にとって、教養教育などの「教科書」は、与えられたものとして受動的に読む、というのが本音だと思いますが、ときには面白いネタもころがっています。ときには、感度を上げて前向きに「

教科書」に取り組んでみるのもよいでしょう。時間が経つと大抵のことは忘れてしまう、というのも事実ですが、それでも何か大切なことが心の片隅に残るはずです。それこ

そが、その人の「教養」というものではないでしょうか？

(理工学研究科教授 重原孝臣)



「見沼」は埼玉大学と同じさいたま市内に位置する、首都圏最大規模の緑地空間です。2011 年度はこの「見沼」を舞台に、埼大生が「自然」と「人」を深く学び、その学びの成果を堂々と発信しました。

事のはじまりは、経済学部・本城昇先生が 2011 年前期に、特殊講義「見沼の緑地保全と地域社会」という授業を開講されたことです。先生は、見沼にお住まいの高名な教育学者・太田堯先生の「見沼フィールドミュージアム構想」に共感をされ、地元の大学として見沼としっかり関わって行こうと授業を開講されました。この「見沼フィールドミュージアム構想」は、受け手に

よって様々な捉え方があると思いますが、私は見沼の自然をそのまま博物館として後世に伝えてゆくこと、そして子どもたちが自然に学ぶことのできる環境をずっと残していこうという構想のことだと考えています。

このような考えがある中で、前期の授業が始まりました。授業では、見沼の保全活動等に携わる地域の方々の協力を得て、学生が見沼地域を多角的な視点から学び、その学びの成果を「地域ガイド」として披露しました。

学生はそれぞれが見沼についての関心テーマを定め、より伝わるガイドの在り方



見沼地域の歴史を教わる学生



学生が演じる「見沼の笛」

を研究しました。披露されたガイドは、普段見えづらい学生それぞれの個性が伝わるもので、地域の方や学生同士の交流を深めるものとなりました。また、この授業の学生満足度が高かったことから、後期も引き続き見沼を舞台とする授業が開講されることとなりました。

後期の授業でテーマとなったのは、見沼の学びを通じて知り得た見沼の魅力を如何

にしてより多くの人に伝えていくか、ということです。テーマをめぐる議論では、前期のガイドでいくつかの学生が採用していた「紙芝居」という発信手段に注目が集まり、ぜひこれを深く学ぼうということになりました。紙芝居の学習には、さいたま市にお住まいの子ども文化研究家の中平順子さんにご協力をいただき、紙芝居の演じ方や脚本・絵の書き方など幅広くご指導をい



いただきました。自分と作品の両方に向き合う必要がある演じ方の世界は奥が深く、学生は自分と向き合うよい機会となったと思います。私達はこの紙芝居の学びの成果として、見沼地域の伝え語り「見沼の笛」の紙芝居を作りました。この紙芝居は、埼玉大学周辺の幼児保育施設や後述するイベント等で上演し、より多くの人に見沼に関心を持っていただくきっかけとなりました。

このように、様々な形で見沼での学びを発信してきましたが、そのハイライトとなったのが昨秋埼玉大学で催行したイベント「埼玉大と地域を結ぶ ～見沼で夢を分かち合う～」でした。このイベントでは、先に述べた大田堯先生のドキュメンタリー映画「かすかな光へ」の上映会や、学生・大田先生・上井学長が見沼と大学について語るトークセッション、上記紙芝居の上演、前期ガイド授業を受講した学生によるプレゼンテーション、懇親会では見沼の保全に携わる NPO 法人「見沼ファーム 21」の方を講師にお招きしてのわら細工を体験するなど、様々な内容が盛り込まれ、充実したものとなりました。イベントに関わった人そ

れぞれが自分らしく見沼の魅力を表現したという点で、このイベントもフィールドミュージアム的な要素を持っていたように思います。

以上のように、2011 年度は見沼を舞台に「自然」「人」について深く学び、活動を行うことができました。この一年間、見沼の活動でつながった人と人との縁を今後大切にしていきたいです。

なお、2012 年度も、見沼の市民のみならずとの交流をはじめ、見沼の自然や農的な暮らしに親しむ活動を既存のサークル「埼玉大学有機農業研究会」の活動と合流する形で行っていきます。サークルでは、見沼を含めた様々なフィールドを舞台に、埼玉大の圃場での有機栽培体験や有機農業研修、地域の民話などを伝承する紙芝居の作成、自然の中で遊ぶスキル向上を目的とした合宿の実施などを予定しています。新たな仲間も募集していくので、関心のある方はぜひ一緒に活動しましょう。

(教養学部・教養学科 3 年 鎌田 諒)

## 見沼たんぼと紙芝居 ～意外と奥が深い日本特有の文化～

皆さんはさいたま市にある「見沼たんぼ」という地域をご存知でしょうか。見沼たんぼは、東京都心から 20?30km 圏内に位置しており、さいたま市北区から緑区に渡って Y 字型に広がっています。面積は約 1260ha、首都近郊における貴重な大規模緑地空間です。さいたま新都心駅や大宮駅などの主要駅から 2?3km という近さにありながら、たんぼや畑、雑木林、河川や見沼代用水によって作られる田園風景と、生きものを育む豊かな自然が現在も残されています。

見沼たんぼの歴史はとても古く、その原型が出来上がったのは縄文時代。見沼が田圃となったのは、江戸時代の徳川吉宗によ

る新田開発からです。自然豊かな見沼には独特の文化・伝統が継承されており、見沼各地に歴史的建造物や祭祀が残されています。

ところで、見沼たんぼと紙芝居に何の関係があるのか疑問に思う方もいらっしゃるでしょう。実は昨年、経済学部で開講されている特殊講義「見沼の緑地保全と交流」の受講学生で、見沼の伝え語りを元に紙芝居を制作・発表したのです。同年 11 月 25 日、埼玉大学・総合研究棟にて「埼玉大学と地域を結ぶ～見沼で夢を分かち合う～」というイベントを開催しました。イベントでは見沼にお住まいの東京大学名誉教授・大田堯(たかし)先生のドキュメンタリー映

画「かすかな光へ」を上映しました。また、大田先生、上井学長、学生によるトークセ

ッションも行いました。その中で創作紙芝居を発表することになったのです。



▲緑色の部分が見沼たんぼ

(さいたま市・見沼たんぼのホームページより)



▲稲刈り後の加田屋新田

原作となった伝え語り「見沼の笛」は、脚本を担当した教養学部・鎌田諒(まこと)さんが取り上げました。鎌田さんは 2011 年前期の経済学部特殊講義「見沼の緑地保全と地域社会」というガイド体験授業で、「見沼の笛」を簡単な紙芝居にして発表しました。そのことがきっかけとなり、今回改めて紙芝居を作ることになったのです。

紙芝居の制作にあたって、私たちは心強い助っ人を得ました。さいたま市浦和区で「カフェ土瑠茶(ドルチェ)」を経営されている中平順子(よりこ)さんです。子ども文化研究家である中平さんは紙芝居のエキスパートです。私たちは中平さんの師事を仰ぎ、脚本から作画、演技指導まで手解きしていただきました。

脚本は完成から作画に至るまで約1ヶ月かかりました。何度も話し合い、読み直し、書き直し…。紙芝居の対象年齢を10歳くらいに設定したため、難しい言葉や言い回しは避け、分かりやすく伝わりやすい文章を作るのは大変なことでした。紙芝居を演じた時の流れや間を意識した脚本作りも素人である私たちにとっては難しいことでした。伝え語り原作といっても、再話するのはなかなか骨の折れる仕事です。何故なら原作では大筋はあるものの、はっきりとした時代背景が描かれていないため、登場人物の補完や物語の起承転結は一から練り直す必要があったからです。原作のとおりにした場面は笛の女と侍の対峙、神主と女のやり取り、灯籠の場面。あとは想像力で補いました。

作画は私が担当したのですが、紙芝居の作

画担当としての苦労や気付きをつらつらと書き述べてみたいと思います。

まず私自身のことから簡単にお話しします。私は幼少から絵を描くのが好きで、外ではあまり遊ばずそればかりやっているような子どもでした。大学生になった今でも絵を描くことは続けており、所属していたサークルでは立て看板やチラシのイラストを担当しました。今回、紙芝居の作画を担当するに至った経緯は、先ほど紹介した講義(「見沼の緑地保全と交流」)で紙芝居制作の話が上がった際、自ら作画担当に立候補したのがきっかけでした。私は経済学部で見沼関連の講義を担当しておられる本城昇先生のゼミに所属しています。今年3月に本城先生が退官されることになっていて、私ももう4年生であるということから、新しいことに積極的に挑戦しようと意気込んだわけです。しかし、今までいわゆる漫画イラストしか描いてこなかったのが、紙芝居に適した絵を描けるのかという不安もありました。そこで作画については中平さんのご指導を頂き、イベントに間に合わせるために3日ほどで何とか完成しました。

作画にあたって、一番苦労したのは風景画です。人物を描くのは得意なのですが、昔から風景を描くのは苦手でした。どうしようかと悩んでいると、中平さんは「紙芝居は背景を描かなくても観ている側の想像力に任せるため、白い背景でも成り立つ。同じ理由で抽象画を描いても良い」とアドバイスして下さいました。私は画面を全部絵で埋めようと考えていたので、その言葉には大変驚きました。完璧に描かなくても

良い、むしろそれが良いのだと知った私は、そのおかげでのびのびと絵を描くことができました。一方で、「見沼の笛」の舞台は室町時代の頃という事なので、時代考証を欠くことはできません。室町時代といってもおそらく江戸時代の新田開発より少し前の、見沼がまだ沼地だった頃の話と想定し、登場人物の服装や住居、地形などの自然について想像力を働かせました。当時はきっと葦原豊かであったろうと想像しながら、紙芝居の1枚目のような場面を描く時は昔の姿に思いを馳せながら描きました。これは見沼の過去と現在を比較する良いきっかけとなりました。紙芝居をご覧になる方にとってもおそらくそうでしょう。また時代考証だけでなく、純粋に紙芝居として観ていて楽しいように、人物の表情はなるべく豊かに描くように努めました。制作期間は駆け足だったために短期間でしたが、紙芝居に込めた思いは強いものとなりました。

イベント本番では、鎌田さんが「見沼の笛」を演じるのを傍らで見守っていました。当日お越しくださった多くの方々の反応がどのようなものになるのか、不安と期待でいっぱいでした。制作した紙芝居が実演されるのを見ながら、私は紙芝居の魅力について気付くことができました。それは、紙芝居は人に観てもらって初めて完成するということです。つまり、紙芝居を介して人との繋がりが生まれるのです。演ずることによって、初対面である会場の方々から共感を得、距離がぐっと縮まるのを感じました。また学生が演じるため、その未熟さや素人っぽさがさらにその効果を高めていると本城先生が仰っていました。イベント終了後、紙芝居を見て下さった方からさっそく「当時、サクラソウはあったのだろうか」とご指摘を頂いたことがその証ではないでしょうか。紙芝居を観る人はただの"観客"ではありません。紙芝居を通して、その場にいる人たちの間には世界観を共有、共感する不思議な関係が生まれるのです。今回、私たちは紙芝居を制作しただけでなく、大学近隣の保育園や図書館での実演も行いました。「見沼の笛」はもちろんのこと、市販の紙芝居も実演しました。その中

で気付いたことは、紙芝居は老若男女分け隔てなく内容を理解できるため、難しい学問と違って親しみが湧きやすいということです。また観る側の感性に任せるという点でも親しみやすさがあります。一方で、紙芝居は演じ手にとって自己表現、自己実現の最適なツールでもあります。演じ手は読む時の演出をどうするか、自分の思いをどう発信するか考えます。それが自己表現、自己実現に繋がるのだと中平さんは仰っていました。また、大学すぐそばの「そよかぜ保育室」や市立保育園での実演の中で、普段ではなかなか見られない学生の飾らない姿や笑顔を垣間見ることができました。紙芝居は観ている側だけでなく、演じ手を成長させ、素の魅力を引き出す力があると思います。

埼玉大学には、今回のイベント実行委員が所属している「埼玉大学有機農業研究会(埼大有機農研)」というサークルがあります。まだ設立したばかりのサークルですが、今後は紙芝居の活動も行う予定です。「見沼の笛」を含む「見沼三部作」の制作や、小学校や公民館での実演も検討しています。今回は上映会の事もあって急ぎ足で紙芝居を描いてしまったため、未熟なところも多々ありました。私はこの経験をバネに、これから新しい紙芝居を積極的に制作していきたいと考えています。有機農研の活動を通して、また中平さんのご協力を得ながら紙芝居の普及活動にも努めていきたいです。

最後に、紙芝居の最初と最後の場面は、事件前後の自然を対比するために風景だけを描きました。1枚目の原風景は最後には形を変えてしまいましたが、それは自然を破壊した結果、原型を無くしたという意味ではありません。むしろ自然を残しながら人と共生しているという姿を表現したものです。自然が見直されている今、私たちは見沼たんぼから多くのメッセージを受け取ることができます。

(経済学部社会環境設計学科4年  
澤田 茉那美)



# 「見沼の笛」

出典 見沼地域の伝え語り

(注) 『LOVE 浦和 ふるさと浦和のいまむかし』

(浦和市発行、1988年) に所収の「見沼の笛」

(106頁～108頁) より

監修 中平順子

脚本 鎌田諒

絵 澤田茉那美

## ①

むかしむかし、見沼は大きな沼でした。

水辺には葦が茂り、サクラソウが咲き、  
メダカやフナ、ウナギがすみ、シラサギが飛び交う、  
きれいな水を湛えた、美しい所でした。



## ②

見沼のそばには、小さな村がありました。

村人1 「のう、もっと田んぼがほしいのお」

村人2 「もっと米をとることは、できないものか」

村人たちは、見沼の周りを少しずつ田んぼにして、沼から、われもわれもと、水を引きました。

田んぼを作れば作る程、見沼は美しさを失っていったのです。



③

そのころ、村では、不思議なうわさがささやかれるようになりました。

村人1「おい、おめえ、聞いたか。夕暮れの見沼によお、笛をふくとんでもねえ美人がでるそうぞ。」

村人2「とんでもねえ美人だあ？そんたら、おらもいちどみてえなあ」

その笛の音は、満月の夜など、たとえようもないほど美しく響きます。

若者「はあ～ なんて うつくしい 笛の音じゃあ」

ひとたび笛の音を耳にした若者は、ふらふらとついていってしまうのです。



笛の音にひきつけられて沼へ行った若者たちが、だれ1人帰ってこないのです。

④

村の年寄り「ああ 大変だ このままでは 村から若者が いなくなってしまうぞ」

うわさは都まで伝わり

ある日、腕に覚えのある若い武士が村にやってきました。



⑤

今夜は満月。

ピーヒュルルー

笛の音が見沼に響き渡ります。

あの笛の女は、美しい音色とともに現れ、武士は、見かけるや否や、

武士「だいじな働き手を奪うとは許されん。

成敗してくれる。えいっ、やあ！」

女「ギャー」

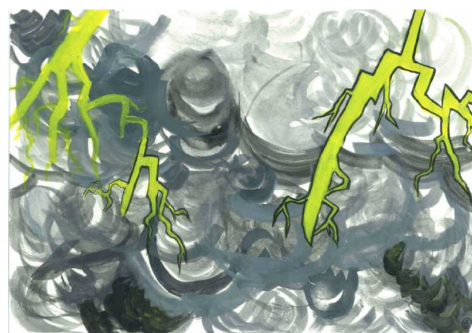
次の瞬間



⑥

びゅううう、ドドドドドド、ザザザザ、ぴかっ  
風が吹き荒れ、つよい雨。

びゅううう、ドドドドドド、ザザザザ、ぴかっ  
武士が驚いてみると、女の姿はなく、  
一本の篠笛が落ちています。



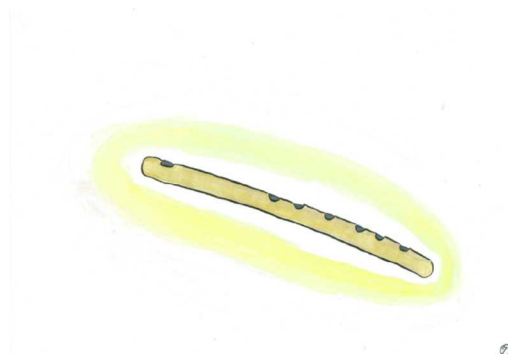
⑦

武士「おお、なんと見事な笛」

武士は笛を、大切に村の神社へ奉納しました。

それから、見沼に女がでることはなくなりました。

しかし、見沼は強い風が吹き、大雨が降る日々が続  
きました。



⑧

しばらくたったある日、神社に気高い女の人がやっ  
てきました。

女「申し、宮司殿。この神社に笛が奉納されている  
と聞きます。わたしに、ぜひそれを吹かせてもらえ  
ませぬか？」

神主「いやいや、これはとても大切なもの。決して  
お貸しできません」

女「そこをなんとか、貸していただけませぬか。」

(間)

神主「うーん。そこまでのうのならば…、少しだけ  
ですよ。」



ピーヒュルルルー、ピーヒュルルルー

たとえようもない美しい音色が、神社に響き渡りま  
す。

ピーヒュルルルー、ピーヒュルルルー

神主「なんとも いい音色じゃなあ」



⑨

ピーヒュルルルー、ピーヒュルルルー

「ぐうぐう、ぐうぐう」

神主は音色の美しさにうっとりして、眠ってしまいました。

「ぐうぐう、ぐうぐう」

神主「はっ、わたしは何をしているのだ。

あのお方はどこへ行かれたのか。



⑩

神主「あっ、大切な笛もないぞ これは大変だ」

神主があわてて神社の外に飛び出すと

神主「おお、おまえたち。今までどこへいつていたのか」

そこには消えたはずの若者たちがひょっこり立っています。

若者1「ああ、おらたち何があったのか思い出せねえだ」

若者2「んだんだ、思い出せねえ」

(間)

神主「不思議なことよ」

若者「んー不思議なことだ」



⑪

神主「村の衆！いつか見沼に出た女は、きっと見沼の龍神さまであろう。

わたしたちが水を粗末に扱ったから、お怒りになって、若者を奪おうとしたにちがいない。」

村人1「おお…。そうかあ」

村人2「そうだのお」

村人3「そうだ、これからは見沼をもっと大事にしなければあなんねえ」



⑫

村人たちは深く反省しました。

そして供養塔を作り、見沼の水を大切に使い、沼は豊かさをとりもどしたのです。

それからは、見沼の方から美しい笛の音が聞こえることはあっても、村人がいなくなることはありませんでした。

むかし、むかし、見沼の笛のおはなし。

(おしまい)



---

見沼の笛

2011年11月25日 第1刷発行

脚本 鎌田 諒

絵 澤田 茉那美 発行 鎌田 諒、澤田 茉那美

さいたま市桜区下大久保 255

埼玉大学経済学部本城研究室

---

## 2011年度 図書館活動

平成 24 年 2 月 10 日現在

学)

### ◎学外会議関係

#### 国立大学図書館会議

23. 6. 16 第 58 回国立大学図書館協会総会（グランドプリンスホテル広島）

23. 6. 17 第 7 回国立大学図書館協会マネジメント・セミナー参加（グランドプリンス ホテル広島）

#### 関東甲信越地区国立大学図書館協会

23. 4. 20 平成 23 年度関東甲信越地区国立大学図書館協会総会（宇都宮大学）

23. 12. 16 第 44 回関東甲信越地区国立大学図書館協会事務（部・課）長会議（新潟大

#### 埼玉県大学・短期大学図書館協議会

23. 4. 21 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（淑徳大学）

23. 5. 23 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）第 24 回総会（淑徳大学）

23. 7. 7 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（淑徳大学）

23. 11. 30 埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）幹事会（大東文化大学）

23. 12. 12 第23回埼玉県大学・短期大学図書館協議会（SALA）研修会（大東文化大学）

---

#### 埼玉県図書館協会

23. 5. 25 平成22年度埼玉県図書館協合理事会（さいたま市民会館うらわ）  
23. 6. 8 平成23年度埼玉県図書館協会総会（埼玉会館）  
23. 6. 9 平成23年度図書館協力担当者会（全体会）（さいたま文学館）  
23. 11. 5 図書館と県民のつどい埼玉2011（桶川市民ホール・さいたま文学館）  
23. 12. 9 平成23年度第2回図書館協力担当者会（さいたま市民会館うらわ）

#### ◎学内会議関係

##### 図書館会議

23. 7. 7 総合情報基盤機構図書館会議（平成23年度第1回）  
23. 11. 7 総合情報基盤機構図書館会議（平成23年度第2回）  
24. 1. 23 総合情報基盤機構図書館会議（平成23年度第3回）

##### 図書館員連絡会（館員連絡会）

23. 4. 15 館員連絡会（平成23年度第1回）  
23. 4. 27 館員連絡会（平成23年度第2回）  
23. 5. 19 館員連絡会（平成23年度第3回）  
23. 5. 31 館員連絡会（平成23年度第4回）  
23. 6. 10 館員連絡会（平成23年度第5回）  
23. 6. 22 館員連絡会（平成23年度第6回）  
23. 7. 21 館員連絡会（平成23年度第7回）  
23. 9. 9 館員連絡会（平成23年度第8回）  
23. 9. 30 館員連絡会（平成23年度第9回）  
23. 10. 14 館員連絡会（平成23年度第10回）  
23. 10. 28 館員連絡会（平成23年度第11回）  
23. 11. 14 館員連絡会（平成23年度第12回）  
23. 12. 1 館員連絡会（平成23年度第13回）  
23. 12. 15 館員連絡会（平成23年度第14回）  
24. 1. 5 館員連絡会（平成23年度第15回）  
24. 1. 19 館員連絡会（平成23年度第16回）  
24. 2. 2 館員連絡会（平成23年度第17回）  
24. 2. 16 館員連絡会（平成23年度第18回）

#### ◎その他

##### 研修・シンポジウム等関係

23. 6. 13～14 平成22年度CSI委託事業報告交流会出席（国立情報学研究所）  
23. 7. 22 平成23年度科学技術情報研修参加（国立国会図書館）  
23. 8. 24～26 平成23年度学術ポータル担当者研修出席（国立情報学研究所）  
23. 8. 31～9. 2 平成23年度図書館等職員著作権実務講習会出席（文化庁）  
23. 10. 6～7 平成23年度機関リポジトリ新任担当者研修出席（国立情報学研究所）  
23. 10. 6 共用リポジトリサービス説明会参加（国立情報学研究所）  
23. 11. 9～11 第31回西洋社会科学古典資料講習会出席（一橋大学）  
23. 11. 9～11 第13回図書館総合展/第8回DRF全国ワークショップ等参加（パシフィコ横浜）  
23. 11. 21～22 平成23年度機関リポジトリ新任担当者研修（第2回）出席（国立情報学研究所）  
23. 12. 5 関東甲信越地区大学図書館職員セミナー出席（横浜国立大学）  
23. 12. 9 XooNips 研究会ワークショップ参加（慶應義塾大学）

##### 図書館事業等

23. 4. 18～22 平成23年度新入生向け図書館オリエンテーション実施  
23. 6. 1 埼玉県地域共同リポジトリ新規参加機関への作業説明会（共栄大学・共栄学園短期大学）  
23. 6. 7 埼玉県地域共同リポジトリ新規参加機関への作業説明会（埼玉県立大学）  
23. 11. 25 埼玉大学機関リポジトリの学内部局説明会（国際交流センター）  
24. 2. 3 埼玉県地域共同リポジトリ新規参加機関への作業説明会（埼玉東萌短期大学）

---

（図書情報課管理チーム 須永博夫）



## 既刊 「武蔵野」一覧

埼玉大学図書館報「武蔵野」は、図書館の動向や皆様のご意見などを紹介する小冊子です。「むさしの」の後継誌として、2009年6月から刊行しています。

---

### 1号 (2009.6刊)

- ・「武蔵野」創刊 (図書館長：坂西友秀)
- ・図書館ニュースの発刊によせて (総合情報基盤機構長：川橋正昭)
- ・旧制浦高記念展示室の完成を願って (旧制浦高同窓会常務理事：上田治三郎)
- ・館員通信 (利用サービス係長：小野寺伸)

### 2号 (2009.8刊)

- ・SUCRAについて (専門員：村田 輝)
- SUCRA(機関リポジトリ)で利用の多い文献トップ 30

### 3号 (2009.10刊)

- ・大学図書館に望むこと (埼玉県立白岡高等学校・教諭： 若海由美)
- ・こんな図書サービスがあればいいな～ (文化科学研究科博士課程： 李芝善)
- ・けやきの窓 (理工学研究科長： 水谷忠良)
- ・館員通信 (元利用サービス係： 白本清香)

### 4号 (2010.2刊)

- ・歴史史料デジタル化の現状： 過去の記録は誰のものか(教育学部准教授：鈴木道也)
- ・けやきの窓： 私の推薦図書 (経済学部長：伊藤修)
- ・「図書館と県民のつどい埼玉 2009」：「デカンショ」と「ファール」(利用サービス係長：小野寺伸)
- ・「埼玉県大学・短期大学図書館協議会」研修会報告 (SALA 広報担当：湊伸子)
- ・ホームページがリニューアルされます！ (工学部4年 渡邊雄)

### 5号 (2010.4刊)

- ・＜フレッシュマン特集号＞
- ・図書館紹介 (図書館長：坂西友秀)
- ・図書館オリエンテーション
- ・図書館発見
  - 「留学生・留学希望者にうれしいニュース」
  - 「グループ学習室新設」
  - 「官立浦和高等学校記念資料室」
- ・「デカンショ」によせて (埼玉大学教養学部准教授・哲学：高橋克也)
- ・子どもと図書・文化
  - 「埼玉大学図書館の児童サービスについて (埼玉県立久喜図書館：山元明美)」
  - 「そよかぜを知っていますか (そよかぜ保育室：橋本慶子)」
- ・けやきの窓 (教養学部長／教授：高木英至)

### 6号 (2010.7刊)

- ・〈埼玉大学エコ特集〉
  - ・AGRICULTURE (図書館長：坂西友秀)
  - ・埼玉大学から発信！有機農業でつながる輪 (経済科学研究科博士前期過程：堀合知子)
  - ・有機農業に興味を持たれた方へ (経済科学研究科博士前期過程：堀合知子)
  - ・有機農業に出会って (経済科学研究科1年：山本仁)
  - ・お薦めの本 (経済科学研究科1年：山本仁)
  - ・埼玉大学有機農業研究会の展望 (経済科学研究科：有坂昌平)
  - ・本の紹介 (経済科学研究科：有坂昌平)
-

- 
- ・ 日本大学文理学部図書館研修（図書資料係：早川雅代）
  - ・ けやきの窓（教育学部長／教授：山口和孝）
  - ・ 全国国立大学図書館協会総会報告（図書館長：坂西友秀）
- 7号（2010.11刊）
- ・ <特集 教育・研究と書籍>
  - ・ はじめに（図書館長 坂西友秀）
  - ・ 過疎という問題に何処よりも早く直面した早川南小学校について（山梨県早川南小学校校長 村松秀樹）
  - ・ 絵本を用いた活動が自閉症児に与える効果について（教育学部教育心理カウンセリング専修4年 成瀬西）
  - ・ 「アナログ本」の存在感（森野うさぎ）
  - ・ 私たちは電子書籍と電子教科書にどう向き合うべきか（教育学研究科学校臨床心理専修 孕石敏貴）
  - ・ けやきの窓（英語教育開発センター長／教授 外山昇）
  - ・ 埼玉大学の教育・研究と埼玉大学生生活協同組合（埼玉大学生生活協同組合理事長／経済学部 岡部恒治）
  - ・ 既刊「武蔵野」一覧
- 8号（2011.4刊）
- ・ <図書館の1年>
  - ・ 東日本大震災からの復興を願う「原発事故」が突きつけたもの（図書館長 坂西友秀）
  - ・ 知の世界への眩しさ（日本青年館公益事業部長・業務部長 佛木完）
  - ・ 大学の猫たち（理工学研究科教授 小松登志子）
  - ・ けやきの窓（脳科学融合研究センター長／教授 中井淳一）
  - ・ 埼玉大学図書館の活動（平成22年4月～平成23年3月）
  - ・ 既刊「武蔵野」一覧
- 9号（2011.7刊）
- ・ <未来を創る－大学から>
  - ・ 大学での学びを未来の創造に（図書館長 坂西友秀）
  - ・ もしも大学時代に戻れたら（埼玉県立浦和図書館長 小川晴夫）
  - ・ 大学生活振り返り地点に立って（理学部 山尾朋未）
  - ・ 平成23年度新入生向け図書館オリエンテーション（情報サービスチーム 岩崎真美/成田義樹）
  - ・ けやきの窓（国際交流センター長／経済学部教授 安藤陽）
  - ・ 埼玉大学在職30年間を振り返って（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館管理部研究協力課図書係長 小野寺伸）
  - ・ お知らせ-図書館の節電対策について（図書情報課管理チーム 須永博夫）
  - ・ 2011年度図書館会議委員
  - ・ 既刊「武蔵野」一覧
- 10号（2011.11刊）
- ・ 「グローバル化」の中の社会と文化（図書館長 坂西友秀）
  - ・ 週に一度は「参考図書コーナー」タイムを（教養学部准教授 野中進）
  - ・ 北欧を旅してみて～ありのままを大切に生きる国～（福祉施設職員 石田かおり）
  - ・ ニューヨーク大学の図書館の紹介（ニューヨーク大学客員研究員／教育学部准教授 清水由紀）
  - ・ けやきの窓（教育学部教授 薄井俊二）
  - ・ ニューヨークの街角から（ニューヨーク大学客員研究員／教育学部准教授 清水由紀）
  - ・ 既刊「武蔵野」一覧
-